みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# 奄美の親族組織



| メタデータ | 言語: ja<br>出版者:<br>公開日: 2014-03-26<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 須藤, 健一<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/5185 |

# 奄美の親族組織

須藤　健一

奄美諸島には沖縄（本島）の〈門中〉と呼ばれる父系の agamous sib (lineage) や内地の〈同族団〉のような一種の patri-lineage と規定しうるほどの親族組織は存在しない。しかし南西諸島の各村落と共通して、奄美諸島の各部落（シマと呼ばれる）にも、〈ヒキ〉ないし〈ハラ〉系と〈ハロージ〉ないし〈チョウデー〉系との親族用語で表わされる親族組織が併存し、社会生活の様々な場面に複雑・多様な形態を示している。〈ヒキ〉系の名称に該当するものとしては、ヒキ、チュビキ、シキなど、〈ハラ〉系のそれはハラ、パラ、チュバラなどがある。この〈ヒキ〉・〈ハラ〉は同義であり、同一部落内に併存する地域もある。〈ハロージ〉系はハロージ、バルジなど、〈チョウデー〉系はキョウデー、ソォーデンチャーなどである。それらは構造上、〈ヒキ〉・〈ハラ〉系が、自己を先祖ないし上位世代者と血縁関係を辿りながら関連付ける概念であり、〈ハロージ〉・〈チョウデー〉系が、自己と両親ないし兄弟姉妹などとの親子・キョウダイ関係に基づく二・三世代間の親族認知の概念であると言えよう。また血縁に基づく cognates と婚姻による affines とは明確

に区別され、特に後者はエンビキ＝ハロージと呼ばれる。

### (1) ヒキの構造

奄美諸島のヒキの性格に関しては、その双系性・父系性をめぐって論争が展開され、結局は祖先との関係に基礎をおく血縁概念であるとの見方に落着いたように思われる。これはヒキが様々な社会生活の場面に、多様な様相を示すという性格によるところが大きいと思われる。実際に、ムラ人の意識しているヒキの観念も、その場面・場面で、父系的であったり、多系的であったりするからである。そこで我々は多様な様相を示すヒキの性格を分析する手掛りとして、ヒキが血縁集団に関するのか、血縁関係に関するのかという視点から考察することにしよう。ヒキが村落社会生活で問題に（顕在化）されるのは、たとえば、配偶者の選定、祖先祭祀、女性司祭者（ノロ）役の継承や儀礼的地位（グジ）の継承などである。

### (2) 血縁関係認知の次元でのヒキ

奄美諸島全域にわたって、自分は父のヒキ、母のヒキ、祖母（父の母）のヒキであるという風に、多系的に血縁関係が辿れる限り、上位世代者との関係付けをするヒキ認識がある。これは理論的可能性として、自分より一世代上では父のヒキ、母のヒキの二つ、二世代上では四つという具合に、$2^n$（$n$ は世代数）の系が考えられる。しかし実際には、それらの系が無限に拡大されるのではなく、ある範囲内で系が選択されてヒキが認知されるのである。たとえば、奄美大島では、ヒキが自分から四世代前の男女いずれか一方の親を選択するが、それはどちらかに決定してなく、いわゆる ambilateral に血縁関係が設定されるという。また奄美大島田検では、ヒキには二つの意味があり、一は同一祖先から分かれた親族集団で、広義のヒキであり、他の一は自己を中心にして、独立した兄弟姉妹、叔伯父母、イトコ、イトコチガイを含む範囲で、更には祖父・孫の代の上下二世代に及ぶとされる。同様なことは沖永良部島西原のハラについてもいえる。いずれにせよ、血縁関係認知の次元でのヒキは父系ないし単系血縁を意味する性格ではないように思われる。この認知観念は、たとえば配偶者の選択において顕在化する。喜界島では俚諺に「畑を買うならアラジ（荒地）のついたのを買え、嫁を貰うならヒキを見て貰え」とあるように、配偶者の選定にはヒキが問題になる。この場合、ヒキの良し、悪しが大きく作用し、それは先祖の行状・功績ないし身体的特徴などによって判定されている。そして当事者の父のヒキ、母のヒキ、更には父の母、母の母のヒキまで遡って問題にされ、父のヒキが良く、母のそれが悪いと判断されると、話がスムーズに進まない場合が起る。この例からも、ヒキが多系的に認知され、問題にされるのである。すなわち、自分と先祖との血縁関係認知の次元でのヒキは、どれか一つの系が強調されるこ

となく、ある範囲内で辿れうる系のすべてが同じ程度に関係をもつのであるから、多系的性格を示すと言えよう。

### (3) 血縁集団への帰属の次元でのヒキ

奄美諸島全域にわたって、血縁関係に基づいて、姓や家名、ないし屋敷名を冠した親族（血縁）集団の存在が指摘され、ヒキはそのような集団への帰属に関して用いられる。この集団は〜ビキとか〜バラと呼ばれ、一般に、墓地を共同にするとか、特定の神社を管理・司祭する氏子集団を形成するとか、また、ある拝所の氏子集団を形成するものである。そして、その集団構成の原理も父系血縁を建前としている。喜界島では、明確に系譜関係が確認される親族の grouping が認められる。この軸となる象徴物は、ムヤと呼ばれる共同墓地である。ムヤは断崖の中腹に掘られた横穴式洞穴墓所で、奄美諸島の中でも喜界島に特に顕著である。その中には、血縁集団（ヒキ集団）の中心家であるラャムトウ（宗家）の管理するオヤデラ（家形の墓石＝宗墓）が中央に安置され、その周囲にヒキ成員のテラ（墓）が置かれていたという。この宗墓の周囲に置かれた墓は、二・三男が分家創設した場合のものが多く、その場合は、父のヒキのムヤに彼等の墓を設置するのである。このことからも血縁集団への帰属は父系の血縁関係を辿ってなされることがうかがえる。すなわち、自分の墓がどの宗墓と一緒になっているかによって自分の所属する血縁集団が確認されるのである。しかし、各ヒキ成員が宗家へ一堂に会し、排他的集団を形成して共同祭祀を実修するという機会はなく、ただ祖先祭祀（後述）の際に、個人毎に宗墓へ参詣するという親族行動をとるに過ぎないから、その〝血縁集団〟は観念的次元での集団構成と見なした方が妥当であるように思える。このような墓を共同にし、父系を建前とする血縁集団は奄美大島、沖永良部島などにも存在する。奄美大島には、ヒキ単位で八幡神社とか琴平神社などを世話する一種の氏子集団の形成も見られる。この氏子集団への帰属に関しては、父系を建前とするが、婿入婚が生じた場合には母を通してなされる。しかし嫁入婚においては母を通して氏子集団へ帰属するというわけではなく、常に父系の line が優先されるのであり、現象面から、あるいは統計的資料のみで、それを am-bilateral と見なすのは早計であると言えよう。また徳之島にはアモトと称される拝所があり、その司祭を中心とする氏子集団が形成される。拝所を祀る本家は男系を建前とし、他は双系的に流動性を示すことから、stem lineage に近似する grouping であると言う。更に加計呂麻島の女性司祭者や儀礼的地位の継承においては、血縁集団への帰属と同様な原理が見出され、父系的に継承されると言う。以上のように、具体的な統合の象徴物（墓とか神社など）が存在しなくとも、奄美大島、沖永良部島、徳之島、加計呂麻島、喜界島の

いくつかの部落では、父系に傾斜した血縁集団の存在が指摘されている。いずれにせよ、より固定的な血縁集団への帰属の次元でのヒキは、父系的性格を示すと言えよう。

### (4) ハロージ・チョウデーの構造

〈ヒキ〉〈ハラ〉系と重複して、〈ハロージ〉・〈チョウデー〉系の親族概念がある。ハロージは父方・母方を区別することなく自己を中心にして上下三世代くらいを範囲とする personal kindred と見なせるようである。そしてキョーデ（チョウデー）は兄弟姉妹関係の概念の延長であり、同一世代に限らず、父・母方双方のオジ、オバ、ないしは子供達をも含む、自己を中心として上下一世代を範囲としている。ハロージ・キョーデはいずれも血族に限らず姻族をも含む性質であるようだが、その両者が併存する地域において、前者は後者より遠い血族ないし姻族を指している。これらの親族概念で意識される親族行動は日常生活での援助や通過儀礼などにおける相互扶助的関係や労働上の結（ゆい）などを通して顕在化する。

### (5) ヒキとハロージ・チョウデー

ヒキとハロージ・チョウデーの違いを「ヒキは祖先から子孫につながる血すじ(血統)で、キョウデーはイトコ達の様な横のつながりをさす」とムラ人が説明している。このことから、前者が ancestor centered な概念で、後者が ego centered なそれであることがうかがえる。そして実際の村落生活においてヒキが顕在化するのは、一般に配偶者の選定という集団の存続に係わること、祖先祭祀における祖先との系譜関係の確認、神社や小祠などを祭祀する氏子集団への帰属、ないしは女性司祭者や儀礼的地位の継承という特定の地位取得に関する分野などにおいてである。これに対し、〈ハロージ〉〈チョウデー〉は日常生活、通過儀礼や労働における相互扶助的関係の設定という分野で顕在化する。以上の構造・機能の相違から、〈ヒキ〉系の親族概念は、祖先との系譜関係に基づいて自己の位置を認知・確定する性質であり、〈ハロージ〉〈チョウデー〉系のそれは、両親との関係に基づいてイトコや兄弟姉妹ないしは限定された世代間での自己との親族関係を認識する性質であると言えよう。そしてある種の集団（氏子集団や祭祀集団など）の affiliation（帰属）に関しては〈ヒキ〉は父系的なかたよりを示すが、〈ハロージ〉〈チョウデー〉はあくまで双系的である。結局、descent（出自）の概念を単系親族組織のみに限定するという視点に拘泥しないなら、〈ヒキ〉はまさに descent の概念で、〈ハロージ〉〈チョウデー〉は filiation に基づく personal kindred の概念で、それぞれ理解できるように思われる。

（民族学振興会刊『沖縄の民族学的研究』昭和四十八年三月刊 所収
原題、渡辺欣雄・須藤健一共著『奄美』）